

# パリ市のアトリエにおける心象描画を通した ワークショップで形成される子どもの絵画表現

渡辺 一洋<sup>1)</sup>

## Formation of Children's Pictorial Expression That Uses Drawings of Mental Images at an Atelier Workshop in Paris

Kazuhiro Watanabe<sup>1)</sup>

### Abstract

This study investigates pictorial expression at a children's workshop held in an atelier in Paris, France the city that many artists have used as a setting for their creations, and which has long inspired artistic works and generated artistic energy.

The modern streets of Paris already maintain an artistic air in their very existence. However, through the years, the city has also been a space of vitality that has seen the history of revolution and tragedy.

We therefore decided to focus on a workshop being held in an atelier in Paris, a city that possesses an accumulation of both history and cutting-edge art. We requested the cooperation of an art studio in Paris "Atelier L.", which has been cultivating children's artistic sensibilities through picture education at unique workshops. Children's pictorial expressions that are produced using a distinctive palette in the form of a table richly bring out the children's creativity and make effective use of the significance of holding workshops in the atelier. In this study, we focus on this type of educational method and clarifies the educational techniques using children's pictorial expressions and their standpoints.

**Key words :** workshop, Paris, atelier, drawings of mental images, children's pictorial expression

**キーワード :** ワークショップ, パリ, アトリエ, 心象描画, 子どもの絵画表現

### 本研究の概要

本研究は、多くの画家が絵画制作の舞台とし、絵画表現のインスピレーションや絵画表現運動を生み出してきた街、フランス・パリ市のアトリエで展開されている、主に子どもを対象とした

1) 育英短期大学保育学科

ワークショップ内の心象的な絵画表現をめぐる一考察である。

パリ市のモダンな街並みは、存在自体がすでに芸術性を帯びているが、過去には、革命と悲劇の歴史的流れを組むバイタリティをもつ空間である。本研究では、そのような歴史と先端の両面の芸術の蓄積を見つめ、パリ市のアトリエで行われているワークショップ内の絵画教育手法を調査し、子どもの絵画表現とワークショップの関連性やアトリエの役割などを探求した。

なお、協力を依頼したパリ市内のアトリエは、独自のワークショップによる絵画教育を通し、表現的裏付けのあるコンセプトから、子どもの芸術的感性を育てているアトリエである。その中で使われているテーブル形式の絵画制作用パレットを用いた子どもの絵画表現活動は、子どもの創造性を豊かに引き出し、ワークショップのもつ「作業場・工房」という意義を有効にしている。本研究では、このような独自の教育方法に着目し、パリ市に所在するアトリエの絵画教育とワークショップの可能性を明らかにした。

## 1. はじめに

現在、日本においては、ワークショップの方法は様々な分野に広がり、ビジネスや自己能力開発の講習などの場で積極的に取り入れられている。それらのワークショップの多くは、空間の中で自己発見としての気づきにつなげていくという行動的かつエネルギー的な手法に解釈されながら、展開されている傾向にある。

ワークショップとは、もともと「共同作業場」や「工房」を意味する英語だが、「講師から一方的に話を聞くだけでなく、参加者が主体的に議論に参加したり、身体や心を使って体験したり、相互に学び合うグループによる学びと方法」として欧米から世界中に広がった。<sup>1)</sup>

本研究においては、その側面を見つめつつも「共同作業場」や「工房」の意味で、子どもにとっての空間や表現環境としてのワークショップについて考察を進める。具体的には、パリ市に所在する「L'Atelier de Charenton (以下、アトリエLと記述する)」の独自のワークショップによる絵画教育を通して、子どもの芸術的感性を育てていく過程を検討する。また、アトリエ内で用いられているテーブル形式のパレットから展開される絵画教育は、子どもの創造性を豊かに引き出し、ワークショップのもつ「工房」という意義を有効にしている。本研究では、この教育方法について調査し、アトリエLのワークショップを通して、子どもの絵画表現の可能性を見つめ直したいと考えた。

## 2. 現代の日本におけるワークショップの展開

現代社会の中で「子どもの感性を豊かにする」ことの表現の成立過程には、文化、遊び、創造力、生活環境、人間関係などのサイクルが、子どものイメージーションに関連深いことは、おおいに予測される。さらに、経済的かつ社会的な背景とそれらの要因は、循環して、子どもの感性に影響を与えていることもアート分野の大きな傾向になっており、その社会的な雰囲気は造形教育を行う指導者の教育視点や子どもの作品の中のモチーフにも結びつきながら展開している。

一方で、大人側に目を向けてみると今日の日本では、美術館イベントや社会教育、あるいは、

企業の学びの場において、ワークショップのスタイルが目ざされ、一種のブーム化となりつつ、ワークショップの文字が散見されるようになってきている。ここでは、アメリカのかつての民族運動や演劇運動の流れを組むワークショップのダイナミックな側面が、今日の閉塞感のある日本社会の風潮を打破するための期待感にもなって、企画者、ファシリテーター、参加者の中で共通理解が図られているようにも推察することができる。

関連して、ワークショップの中でスタートの段階で行われるアイスブレイクは、「アイス(氷)」を「ブレイク (打ち破る)」という原義の通り、「見知らぬ複数の人がいる場所で固い雰囲気壊すこと」として、参加体験型ワークショップの出会いの演出活動を指す手法として、教育空間を中心とした場で用いられている。この手法もワークショップとともに着目が広がり、浅く広い関係性の傾向が高い現代社会において教育方法の導入部位に合った形式でもあることが、流行の要因であるとも考えられる。

このアイスブレイクは、例えば次のようないくつかの手法がある。

- ・参加者の心をほぐす「チェーン術 (輪や車座になる方法)」として、その場に存在してもいいという安心感をもたせ、他の参加者にも十分な関心に向けることができるようにする。
- ・身体をほぐす「ペア術 (二人で行う方法)」として、心だけでなく、身体もほぐし、出会うべき人と出会えるようにする。
- ・協力できる雰囲気づくり「グループワーク術 (6人程度の集団で行う方法)」として、お互いに協力できる雰囲気を醸し出す。<sup>2)</sup>

ワークショップの方法は、アイスブレイクを入れながら、集まった参加者によって構成されていく活動的なものでもあるが、ヨーロッパにおいては、「工房」の意味がとても大きいと思われる。そこで、次にワークショップの定義、歴史、造形教育との関わりについて述べていく。

### 3. ワークショップの定義や歴史と造形教育の関わり

現在、ワークショップの定義は、いくつか確認できるため、ここで整理する。それというのも、現在、かなり広範囲でワークショップという言葉が用いられており、その解釈が様々なためである。『広辞苑』や『大辞林』では、「仕事場、作業場、工房」という解釈が第一に挙げられ、次に「参加型の研修の場」の意味に使われている。

「仕事場、作業場、工房」という意味で使われるようになったのは、演劇や美術のアート分野や都市計画などのまちづくりの分野からで、次の3つの現代用語辞典を見ると明らかとなる。

「現代演劇の用語として用いられている」(『現代用語の基礎知識 2000』)

「現代美術のコーナーで紹介されている」(『知恵蔵 2000』)

「まちづくりの用語として説明されている」(『イミダス 1995』)

また、「参加型グループ学習」などと訳されることもあり、「参加」(講師の話を一方向的に聞くのではなく、自ら参加し関わっていく主体性)、「体験」(頭だけでなく身体と心をまるごと総動員して感じていくこと)、「グループ」(お互いの相互作用や多様性の中で分かち合い、刺激し合って学んでいく双方向性)、という三つがキーワードになる学習方法である。

このような動向の中で、中野（2001）は「参加者が自ら参加・体験して共同で何かを学びあったり創り出したりする学びと創造のスタイル」<sup>3)</sup>をワークショップの定義として位置づけ、双方向的、全体的、ホリスティック（全包括的）な学習と創造の手法として紹介している。

また、社会教育の分野では、1994年にワークショップの要点を次のように紹介し、明快に整理している。

「ワークショップとは、参加者が受け身でなく、積極的に関わる研究集会のことである。『workshop』とは、もともと『作業場』の意味で、転じて『研究集会』を意味するようになった。講師が一方向的に教育を行う講習会とは違って、参加者も自分自身の知識や体験をもって積極的に関わることが期待される集会である。文化活動のような創造的なテーマを追求するためには、ワークショップは欠かせない方法と言える。要点としては、ワークショップに先生はいない、『お客さん』でいることはできない、初めから決まった答えなどない、頭が動き、身体も動く、交流と笑いがある、という五つである」<sup>4)</sup>

このようなワークショップの経緯を見ていくと、今日の日本におけるワークショップの活発な展開が腑に落ちる面が多くある。つまり、現代の問題が山積みに複雑化した社会にとって、合致した教育的手法であることが想像できるからである。

日本で最初に、ワークショップを「作業場」から現在のように使い始めたのは、造形教育に関するアート系（演劇、ダンス、美術、音楽、工芸、自己表現）の分野である。ここでは、観客として鑑賞を楽しんでいた人達が「やってみたい」という希望からやがて、自らの身体を使って、実際に習ったり学んだりする場に発展していったことが成立の経緯となっている。また、美術指導における上から下への一方的な技術指導から相互の交流や創造的精神を優先させる試みなどが20世紀のアメリカを中心に展開してきた流れが源流<sup>5)</sup>となっている。

このように見ていくと、ワークショップが歴史的な流れとともに、様々な社会の変化に応じて、教育方法として大きく展開してきたことが確認できる。また、各分野において、「自らで体験して学び創りたい」という願いが込められていることは、ワークショップの言葉の源流である「作業場」の中に込められている「創造の場」という意味を大きくはき違えていないことが考えられる。

その上で、次にパリ市のアトリエLにおける心象描画を通したワークショップで形成される子どもの絵画作品や絵画表現に至る空間の成立過程について、現地のインタビュー調査を通しつつ、考察する。

## 4. パリ市のアトリエにおけるインタビュー調査を通して

### 4-I. インタビュー調査

以下は、アトリエLにおいて行ったインタビュー調査の記録である。インタビューは、平成24年9月にパリ市内に所在するアトリエLを訪問し、実施したものである。インタビューでは、アトリエLのコンセプトやワークショップの意義などを中心に、子どもの表現を引き出す教育方法などについての質問を進めた。

**アトリエ主宰者：**「アトリエでの制作は、アートセラピーではなく、定期的に自由に絵を描くこ

とで数多くのいい効果を生みます。非常に内気な子ども達も自己を表現するようになります。落ち着かない子ども達も注意を集中できるようになります。動作が少しずつ良くなって、より率直（自発的）で、陽気な『L'Atelier de Charenton』で行う絵画表現は子ども達、青少年、大人と同様豊かな経験です。創造性、自身の評価、そういったものすべては落ち着いた精神の集中からくるメリットです。障害のある子ども達もアトリエの授業を受けられます。彼ら専用の支援が設定され、彼らに応じた支援があります」

**アトリエ主宰者：**「アトリエLは、近年開設した新しいアトリエです。パリの隣にある町、シャラントンという町、このアトリエは3つの大きな原則によって作られています。でも要約することは非常に難しいです。なぜなら、アトリエは人生の学校でもあるからです。こちらのアトリエで展開している3つの原則というのは、『率直さ』『尊重』『教育』です。もちろん、それらは混じっていて、かっちりと分けられるものではありません」

**アトリエ主宰者：**「毎週3歳から20歳までの年齢がまちまちの子ども達が8人から10人集まります。1時間半（3、4歳の子どもは1時間）の活動時間を目安にして、毎週のようにやってきます。『率直さ』という原則については、自発性といってもこちらからテーマや指示を一切与えることはせず、各自が自由に絵を描いています。特にモデルを指定していないため、子ども達は自由にアトリエで表現を行います。それが、すなわち創造性につながっていくと考えられます。今度は一方『尊重』という原則ですが、まず、アトリエは集団で使う場所です。さらに集団で使う機材がある。子ども達はそれぞれの機材を尊重するということです。それから使い方もでたらめな使い方をしないということを学ばなければならなりません。でも、これはいわばゲームのルールのようなものです。つまり、軍隊のルールとは違います。少し、楽しむところもあります。子ども達と遊ぶと子ども達は、それを受け入れてくれます。なぜ子ども達にきちんと元に戻させるか、整理整頓することを要求するかというと、彼らの人生と同じ様に一人で生活しているのではないからです。例えば、オレンジの筆を赤の中に落としたとします。すると筆にはしみが付きます。ですから、それを別の子どもが使いますと、その子どもが望んでいたものと違う色が出てきてしまいます。ということで、子ども達に注意するように要求します。気をつけるようにということです。それから三番目の『教育』ですが、それは私の仕事になります。つまり、その『率直性』とか『自発性』とか『尊重』とかそういったものから、自由というのは、すべて私の教育の観点から行われるわけです。教育というのは様々な要素が混ざっているわけですが、私自身がまず一人の人間です。子ども達も集団生活をしながら一人の人間として存在しているわけです。それからこのアトリエの教育でいうと、非常に忍耐強さとか勇氣といったものが必要かと思えます。もちろん、絵画表現は、その自由さとともに行われるわけですが、子ども達がその中で最大の能力を引き出すということです。それが結果を生みます。私が特にモデル等を見せなくても、子ども達は一人一人能力を発揮して、非常に正確な絵を描くようになります。他人それから自分を尊重しながら行う作業の中で、自分の能力を成長させます。私の教育者としての立場から言いますと、もちろん子ども達が自由に技能を表現させるということが一つありますが、そこに私の専門家としての技術的なアドバイスをつけます。その中には『いけない』という言葉も必要になります。『いけない』という言葉伝えるのも教育の一環だと思います。例えば、筆に水を含みすぎて使いますと、その水が流れてしまいます。

それはやっぱり『いけない』と伝えます。私の教育者としての難しさというのは、子ども達を集団で扱いながら尚かつ個人的にも扱わなければならないというところにあります。私はこのために、このテーマについて講習会をやっております。子どもに絵画を描きなさいという時には、それにはまず一つとして、絵の中には特徴があるのを知っているからです。それは、絵の中の信号というか発信するものは、表現として、普遍的なものがあるからです。科学者によりますと、子ども達が表現するその絵や表現するものというのは、環境がどうであれ、人種がどうであれ、日本であれどの国であれ、共通するものがある。そして、すべての人類に共通の表現について、今から説明いたします。子ども達が表現するサインという言い方をしていますが、これは約50くらいあって、講習会を開く時にそれを説明します。その手は、サインというか記号的なものを表現する場合には頭で考えて行きます。これがその人の発展、その人の自己の実現につながります。非常に楽しいのでちょっと説明いたします。とても丸まっているような、これは運動神経のような、いわゆる知能の問題ではなく、知能というより、手の動きです。繰り返されます。この円を描く動きが気持ちいいんですね、子どもにとって。全然ここに来たことのない子どもとか、何回も来ている子どももいます。あの一番小さいグズグズ泣いていた子ども(筆者の訪問時にアトリエに来た子ども)は今日初めてなんです。初めてなんで知らなかったんですね。他の子ども達は初めてじゃない。まだ手の動きが円を描くことで、閉じるまでの動きに至っていない。だから、まだ運動神経ができてない。ここで円を描くことはできました。いつかは、手で違う線を描くと思います。もう一つ面白いことですが、この絵(他のアトリエに通う子どもの作品)では、いつも太陽、人、光を放つ形があります。世界中の子ども達は、太陽みたいな動きのあるものを別の場所に配置することがあります。子ども達は境界という認識をしばしばこのように描きます。彼らの必然性になります。それから家です。ここでは、もちろん家の描き方は教えません。線の一本、二本とかの三角形を作ったり、組み合わせたら家になりました。これは、いわば、形のゲームといえると思います。これは、人の構造が同じように描かれています。このような表現をする子ども達を尊重します。そして、世界中の子ども達が同じような表現をしますが、それぞれは、ユニークな存在です。こういったものを彼らのサインという言い方をしています。木などを自然に自発的に描いているわけです。例えば、子ども達に正面にいなさいと言う時には、私自身も正面にいます。パレットは、18色あります。筆は、54本で3倍あります。筆は、できるだけ、穂先を使うように指導します。さらに、制作が進んだ子どもには、混色した色を指導します。フランスでは、環境適応のしにくい子どもや大人を環境適応しやすいような状況にうながす方法を提案するアドバイザーとしての教育者がいるのですが、そういう職業の人達もこのアトリエで研修を受けます。このアトリエにおける教育方法は、私が開発したのですが、50年前の第二次世界大戦後に、テーブルパレットの絵画制作方法を見つけ出した人がいます。その人から、9年間に渡り、私も絵画制作を通して絵画教育の学びを深めました。パリにおいて、アトリエを開くには、スーパーバイザー的な見方や規律という骨格がしっかりしていないといけません。規律というのは、固まってしまうような規律ではありません。テーブルパレットの絵画制作方法を見つけ出した人は、修道院で孤児を預かる人物でしたが、絵画を描く際に、テーマを与える子どものグループとテーマを与えない子どものグループに分けて、指導しました。その中で、テーマを与えない子どものグループ

の作品からは、陽気で斬新な絵画表現が生まれてくることを発見しました。ここでは、子ども達は、実によく表現の仕方を知っています。しかし、今は、50年前とは違った問題が発生しています。これらの要因は、インターネットなどの情報化したものにふれていることから集中力を欠いているという点にもあります。例えば、3歳児であれば、いきいきと自分を表現する段階ですが、すっかり慣れていているとか、いきいきとしたものが最初は出にくくなっています。しかし、アトリエで自分で考えて表現している経過を通していくと、絵を描くことに喜びをもつようになっていきます」

次に、アトリエL主宰者への個別な質問内容から、いくつかの造形教育の項目を通じた質問を行った。その経過について、記述していく。

**筆者：**「アトリエの空間構成についてのねらいやコンセプトはどのようなことですか」

**アトリエ主宰者：**「アトリエの空間（訪問したアトリエ）は、古いですが20m25平米であり、2m50cmくらいの天井があります。絵をたくさん置くことができ、時には大きな絵を描けるような環境が必要となります。アトリエの空間は四角か長方形が望ましいです。それも全部が閉じた空間、つまり、外から見えず、外からも見られない、影響を受けないということです。天井の上と壁にはコルクを使用します。その上にクラフト紙。それだけで、非常にシンプルです。ちょうど、必要なだけで充分です」

**筆者：**「アトリエLで使用する絵の具などの造形素材はどのように選んでいますか」

**アトリエ主宰者：**「まず、絵の具の置いてあるテーブルという部分は、非常に合理的です。このテーブルのおかげで、それぞれの子どもの造形活動における動作が見られます。さらに、使用している子ども同士で邪魔になりません。まあ、ピアノのようなものです。また、筆は、最高のものだから、この筆を選びました。『プティグリ』という品質です。絵の具は、全部グワッシュで、他の絵の具を混ぜないで、「ラスコー」といういい品質のグワッシュだけを使います。日本でもいい製品は多くあると思います。アトリエでは、子どもの造形活動において、とても値段の高い素材を使っています。例えば、筆で言いますと滑りが良く、しかも抜け毛が少ないと



図1 アトリエ周辺の風景



図2 アトリエ正面の様子

ということで、子ども達にとっては非常にいいということになります。フランスにおいては、原因と結果をしばしば混同することがあります。例えば、『子ども達がいい絵を描けない』という場合、実は子ども達にいい器材を与えていないから、そのようなことが起こるといえるわけですね。そうなりますと失敗例になってしまうわけです。ですから、アトリエLでは、そういう面では成功例が多くあり、すべての子ども達に表現の能力があります(アトリエLでは、自閉症の幼児も受け入れ、活動を行っている)」

筆者：「アトリエLでは、何歳児から子どもを受け入れていますか」

アトリエ主宰者：「3歳児から受け入れています。4歳、5歳、6歳と年齢は様々です。アトリエでは、絵画制作だけでなく、生の土を使って粘土細工も行っています。アトリエLでは、粘土細工を行う際には、粘土制作のためのテーブルを設置し、粘土を少しずつ与えます。ダイナミックな荒々しい活動ではなく、繊細に制作を進めながら指先を使って、粘土用の道具を用いて行いますが、できれば、粘土細工専用の部屋があった方がいいと考えます。また、近隣にある別のアトリエLでは、40年のキャリアをもつ主宰者があり、スーパーバイザーとして、このアトリエに来て、客観的な意見を受けることがあります。さらには、子どもを対象としている



図3 アトリエで活用されている描画用パレット



図4 アトリエで制作された子どもの絵画作品



図5 アトリエで制作された子どもの絵画作品



図6 アトリエで制作された子どもの絵画作品

以上、保護者である親も受け入れなければいけません。アトリエLに来る親は、複雑なオーラがあります。そこを理解しながら、アトリエ運営を進めていかなければなりません」

筆者：「アトリエLの作品管理については、どのように工夫していますか」

アトリエ主宰者：「子ども達の描いた作品は、アトリエにすべて置いていきます。例えば、子ども達の絵をサロンに飾ることがありますが、そういうことはせず、いいにしても悪いにしても評価を避けるために家庭には持って帰させないようにしています。そのため、見方の中立性というものを尊重します。アトリエで描かれた作品について、絵画心理等の分析はしません」

筆者：「アトリエLでのコミュニケーションについては、どのように考えていますか」

アトリエ主宰者：「子ども達にとって、アトリエLでの活動は、大きなコミュニケーションの場になります。私は、パリ市でアトリエにおける活動の重要性を説明した最初の人間です。それから絵画表現という活動が子ども達にとって、大変いい活動であることも説明しました。それというのも、アトリエを始める当初、パリ市の多くの親達はドイツ語や中国語などの外国語を学ぶ傾向にあり、子どももその影響を受けます。絵画表現という学びは、それらの次に優先される傾向があったため、私の教育方法を広く公開し、ホームページなどからも見られるようにしました。その後、芸術家の作家が訪ねてきて驚いたりしたこともありましたが、徐々に理解され、現在では、パリ市の助成金を受けることができました。何よりもアトリエLで子どもの表現や心、人間性が大きく成長していくことが何よりです。また、パリ市が空間を提供してくれ、作品の展示などもできるようになり、アトリエLにおける子どもの表現方法やコンセプトの説明もできるようになりました。子どもの作品は、小さい頃は具象的である傾向が多く、大きくなるにつれて抽象的な表現も現れてきます。しかしながら、圧倒的に具象的な表現が多いです。年間150人くらいの子どものを見ますが、悩み苦しんでいる絵画の中の線は一本もひかれていません。みんな陽気に溢れています」

筆者：「絵画制作の事前段階で行うエスキース作りについてはどのようにしていますか」



図7 アトリエで制作された子どもの絵画作品



図8 アトリエで制作する子どもの様子

アトリエ主宰者：「これは、少し休ませるために行います。それほど絵画表現が習慣ではない子どもにおいては、『お母さんに会いたいとか、家に帰りたい』など、特に小さい子どもの心境があるため、判断して、こちらからエスキース作りをすすめます。エスキースにも様々な表現内容が隠されています」

筆者：「最終的な子どもへの絵画作品の返却の機会を教えてください」

アトリエ主宰者：「子ども達の親は、アトリエを卒業する際、それまで描きためた作品を翌年6月に受け取るための機会があります。そこで、私は、パッケージで年代順に作品を包んで開けられないようにします。ここで、私のサインを入れます。そこには、『子ども達を気まぐれくさせないために、大人になるまで、このパッケージを開けないで下さい』と書いて渡します。このことは、最初から親はアトリエに来る際に知っており、この規律を守り抜く親もいれば、開いてしまい『すばらしい』と書いてサロンに全部飾った親もいます。3歳から7歳くらいの子どもは批判ということを知りません。9歳くらいになるとわかりますが、親が開いてしまったとしても子ども達は気にならないわけです」

筆者：「幼稚園以外の時間の中で、アトリエで絵画教育を行う意義はどのようなメリットがありますか」

アトリエ主宰者：「幼稚園、小学校の場合は、テーマや四角、丸という形の規律をもって、絵画教育を進めていきますが、アトリエにおいては、まったく表現が自由であるため、そのことが好まれています。つまり、親は子ども達に自由を与えようとします。しかし、実際には、その自由さゆえに、少し指導してほしいという親もいます。そのため、そのような教育的な面からも様々な可能性を含んでいます」



図9 アトリエで制作する子どもの様子



図10 アトリエで保管されている子どもの絵画作品

これまで、インタビュー調査を進めてきた話の内容からも日本において多く行われているワークショップのイメージとは若干、ニュアンスの違った位置づけである「工房」というワークショップの定義及び空間意識をアトリエ主宰者から確認することができた。

しかし、「自分を見つめ、自分を発見する」ワークショップの大きな枠組みは、日本の多くのワー

クショップ事例と共通であると考えられた。実際に、制作を進める際の事前段階で行われる絵画のエスキース作りは、いわゆるアイスブレイクに相当するリラックスした自己表現に入っていく際の第一段階であるように考えられた。「自分で考えて表現する」ということは、子どもにとって孤独や集中力の持続の困難さを示していくものの、ワークショップを通して、自分の内面にあるイメージを視覚的な絵画作品にする行為は、直接的に絵画表現によってイメージを表すことのできる可能性が多く含まれていると考えられる。

#### 4-II. インタビュー調査を基にしたワークショップの考察

インタビュー調査においては、パリ市におけるアトリエLの絵画教育方法を通して、ワークショップを「作業場、工房」の意味から捉えた歴史的にも美術的表現の本場であるパリ市の確固たる位置づけを確認することができた。また、アトリエ内で実際に接した子ども達が目の前にある一枚の白い画用紙に向かい、落ち着いて自分の内面に自問自答し、静かに絵画表現を行う姿勢から、パリ市の文化的にも精神的にも高度な芸術的感性の解釈を垣間見ることができた。

さらに、アトリエLのワークショップにおける、「自分で見つけ出していく」という根本的な時間は、パリ市の街並みや空間によって気品のある贅沢な空間にも解釈できた。アトリエLで制作していた、ある子どもは、サッカー観戦、また、ある子どもは飛行機、友達などと脳裏にイメージした絵画を作品にして視覚的に自分自身と自問自答しながら、絵画作品を完成させていた。その行為自体は、子どもにとって、様々なイメージが脳裏を飛び交う独創的な時間の表現行為に捉えられた。

また、アトリエLで独自に用いられている絵画用パレットは、個人と他者との表現行為の可能性をつなぐとともに、アトリエにおける制作マナーや他者との協同的な表現空間の雰囲気を作り出すアトリエL主宰者のメッセージが込められていた。それとともに、そこに配置された筆や絵の具の本物へのこだわりが、アトリエの「規律」を構築するアトリエL主宰者の教育的裏付けと配慮によって、アトリエLの空間で制作する子ども達の表現につながっていると考えられた。

### 5. 全体を通した考察とまとめ

前述したインタビュー調査を通して、ワークショップの「作業場、工房」の意味を根源としたアトリエLの子どもの絵画制作のコンセプトは、今日、日本でワークショップとして捉えられている場合が多い「研究集会」の意味とは異なる進行状況であることが確認できた。昨今、ワークショップにおいて、進行役（多くはファシリテーターの役割）としてのポピュラーなアイスブレイクなどから、活動の場の雰囲気を柔らかくしていくということもアトリエLでは強調して行わず、「子どもが自分で考えて絵画を描く」というシンプルな教育方法で構成されていた。

さらに、パリ市のモダンな街並みの中に所在するアトリエLにおける絵画表現の展開は、直接的な絵画指導としてではなく、絵画制作に至るまでのパレットや筆、絵の具などの道具のもつ本物の素材感、アトリエの空間づくり、「率直さ」「尊重」「教育」という3つの大きな教育原則によって、運営されていることが、子どもの絵画制作において自己表現を豊かに実現させていると考えられた。すなわち、インタビュー調査の中で、アトリエ主宰者が語っていたように「アトリエは

人生の学校である」というメッセージが、ワークショップの「作業場、工房」という言葉の柱となる根源的意味を示唆していることを導き出すことができた。

本研究では、ワークショップの教育手法としての絵画教育に迫っていく過程で、絵画教育におけるワークショップの哲学的な意味が込められたアトリエの存在にも触れる結果となった。このことは、現在、日本で展開されている絵画表現を行うワークショップの中で、「企画する側がどのように子どもの絵画表現を豊かにしていくことができるか」という進行方法の問題としても多くの教育的視点を含んでいると考えられる。

今回の調査によって、深い芸術の歴史をもつパリ市に所在するアトリエLが行っているワークショップの絵画教育を通じた子どもの絵画表現の可能性を探求することができた。今後もアトリエLのワークショップの展開に着目しながら、パリ市のアトリエで行われているワークショップが形成している子どもの心象的な絵画表現に関わる教育方法を引き続き、解析していきたい。

### 謝辞

本研究は、平成24年度育英短期大学学内奨励研究において実施したフランス・パリ市における研究調査をまとめた内容となっている。調査実施の際には、「L'Atelier de Charenton」主宰者をはじめ、現地の取材サポートスタッフの厚い協力を賜うことに恵まれた。ここに深く、感謝の意を述べさせていただきたい。

### 注

- 1) 『ワークショップ』、岩波新書、2001、中野民夫、p. ii。
- 2) 『アイスブレイク 出会いの仕掛人になる』、晶文社、2014、今村光章、pp.22-25。
- 3) 前掲書1)、pp.10-12。
- 4) 『社会教育』第49巻第9号、1994年10月号、(財)全日本社会教育連合会。
- 5) 前掲書1)、pp.21-22。

(2016年2月12日受理)